

34-8 古代都市メッセネのスタディオン地区調査報告

—スタディオンの概要—

大学院自然科学研究科 助 教 授 伊 藤 重 剛
博士前期課程 吉 武 隆 一

熊本大学伊藤研究室ではメッセネ考古学協会が行っている発掘調査に参加して、1997年から毎年メッセネの南端にあるスタディオン地区の建築学的な調査を行っている。スタディオンの遺構の発掘作業は、2000年夏の段階では終了し、遺構の大半は明らかになった。

本稿では、メッセネにあるスタディオンの遺構の詳細を報告した。遺構の実測は、ラジコンヘリを用いた航空測量である。図面の作成は、遺構の航空写真の解析による。

スタディオンの平面は馬蹄形で、左右対称で軸線的な形となっており、ヘレニズム期の特徴をみることができた。三方がストアにより囲まれている点は、特異であった。

スタディオンの座席は、北側のものは石造で、南側のものは土の斜面になっていたものと推定された。なお、石材はこの地方から産出される風化しやすい石灰岩であった。座席部分の最大長さは約65m、最大幅は約60mで、東、北、西側の約10～15m後方にストアが配されていた。座席の段数は19段で、その傾斜角度は約25.3度であった。座席全体は北側円形部分が9つ、東側が5つ、西側が4つ、合計で18のブロックに分割されていた。それぞれのブロックは幅が約6mで、ブロックの間には幅約0.7mの階段があった。

トラックのスタートラインとゴールラインの間隔は、通常は600ftつまり1スタディオンであるが、このスタディオンでは500ft(150m)で造られたようであった。トラックが短い理由は、何らかの理由で建設が中断されたためか、ローマ時代に座席を途中から破壊して円形闘技場を建設したことが考えられたが、はっきりとしたことは不明であった。

(日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2 2001年9月)